

<原 著 論 文>

小林澄兄における労作教育思想研究の特質

玉川大学教育学部

森山賢一

Characteristics of “Arbeits erziehung” Study by Sumie Kobayashi

Tamagawa University Department of Education

Ken-ichi, Moriyama

キーワード：労作教育, 勤労教育, 体験

KEY WORD: Arbeitserziehung[Ger.], Arbeit[Ger.], work training, Experience

概要

本研究は労作教育の理論的研究者である小林澄兄の労作教育思想研究の特質について考察、吟味したものである。小林の労作教育思想は単なる欧米労作教育思想の受容と分析にとどまらず、我が国の勤労教育思想との融合、調和から新しい教育学としての労作教育学の構築に向けた労作原理の確立へと進化していった道筋が浮き彫りにされた。

1. はじめに一問題の所在

本稿においては、我が国の労作教育研究の代表的人物である小林澄兄<sup>1)</sup>の労作教育思想研究をもとに欧米労作教育思想史研究、「労作」ならびに「労作教育」の概念、「労作教育」の価値を中心に、その特徴を明らかにすることを目的とした。その内容としては、欧米における労作教育思想と我が国独自の勤労教育思想の両面における融合的展開から、その到達点としての労作教育学の構築に向けた小林の労作教育原理を考察、吟味したものである。

これまで小林澄兄に関する先行研究そのものが非常に少なく、その上、小林が一生をかけて研究に取り組んだ労作教育についての詳細な考察、吟味はほとんどないといってもよいほど示されていない状況であり、研究成果は乏しいものとなっている。

ここでは小林澄兄の労作教育研究における主著である『労作教育思想史』(昭和9年刊)および『日本の勤労教育の思想史』(昭和26年刊)をもとに、彼の労作教育思想とそれを踏まえた労作教育学の構築とその意義について明らかにしたい。

2. 労作教育思想史の研究

小林の教育思想研究の中心は、まさに労作教育思想研究であったといってよい。昭和9年にその中心と位置づけられた著書『労作教育思想史』が出版されたが、彼はこの著作の意図を「労作

教育学の最後の最善の建設にある。」<sup>2)</sup>としている。本書は昭和46年に改訂版として再度出版されたが、ここにおいても小林は「年来の特論である労作教育の重要性を認め」<sup>3)</sup>てもらいたいと切望している文言がある。以上のような記述からも小林の労作教育に対する強い思いが伺えるのであるが、これを基盤としながら生涯にわたって彼は、労作教育の理論的、歴史的研究を行ったのである。

ではこのような彼の労作教育に対する深い思いは、どこから沸き上がってきたのだろうか。それは、教育の目的から導かれたものなのである。このことについて小林は次のように述べている。

「教育の目的は、有能に真面目にはたらいて価値的生産者たるべき人を養成することを期するにある。かかる教育の目的を實現するための方法として、児童・生徒の個性を尊重し、彼等を社会において社会によって陶冶しなくてはならず、彼等に適正な自由を許し、直観を活発ならしめ、学習から理解へと指導することが必要であり、これ等の方法を心身一体観の上に立脚せしめるべきである。・・・(中略)・・・労作教育学にもとづく労作教育は、それ自身右のやうな教育の目的を目的とし、同時にその目的を實現するための最善の方法たるべきものである。この労作教育が心身一体観の上に立脚することは、いふまでもない。」<sup>4)</sup>

このような教育における根本的問題を浮き彫りにし、さらにこれまでのさまざまな教育に対する弊害や、当時の教育への批判を汲みながら彼の労作教育思想研究は進められていくのである。

さきに述べたように、彼の教育学者としての最大の関心は労作教育であったが、そのことが最も良くあらわれている著書が、昭和9年に丸善株式会社(現在の丸善出版株式会社)より出版された『労作教育思想史』である。この著書は、同社より昭和23年に再版され、さらに昭和46年には玉川大学出版部より改訂版が出されるといったように、実に長きに亘り我が国の労作教育思想の理論的研究書としての地位を誇る名著である。

本書は欧米、特にヨーロッパにおける労作教育の発達を考察したものであり、労作教育思想前史と同現代史によって構成されている。

労作教育思想前史においては、ロック(J.Lock 1632~1704)をはじめ、ルソー(J.J.Rousseau 1712~1778)、ゲーテ(J.W.Goethe 1749~1832)、ペスタロッチー(J.H.Pestalozzi 1746~1827)、フレーベル(F.Frobel 1782~1852)、ヘルバルト(J.F.Herbart 1776~1841)といった欧米における偉大な教育学者の労作教育思想を取り上げている。そこでは「労作教育」の意義が明確に示され、特にヨーロッパにおける労作教育の発達について史的考察が行われている。さらにつづいて、ガウディヒ(Gaudig 1860~1923)、シャイブナー(Scheibner 1877~1961)、ケルシェンシュタイナー(G.Kerschensteiner 1854~1932)、デューイ(J.Dewey 1859~1952)らの労作教育思想について考察しながら、小林自身の労作観が述べられているが、これはヨーロッパにおける労作教育の現代史でもあり、いわば本書の本論にあたる。

今一つ、彼の労作教育思想研究における代表作は、昭和26年に誠文堂新光社より出版された『日本の勤労教育の思想史』である。本書の「序」には、「筆者の別の書『労作教育思想史』(昭和9年—1934年、改訂昭和23年)の姉妹篇として、この本がいよいよ公にされ、我が国とくに労作教育の道しるべとして、多少なり役立つことが出来るであろうと思はれる。」<sup>5)</sup>とし、本書の題

名に「勤労」の語を使用した理由についても、「日本における労作の思想は、おしなべて道徳的方面を高調するものとして発達を遂げて来て居り、従って労作教育が説かれるよりも、むしろ勤労教育が問題とされて来てゐるから。」<sup>6)</sup>と率直に述べている。

すなわち本書は、前書『労作教育思想史』を受けて、労作教育の重要性を提唱したものであるとあってよい。

以下に小林における労作教育思想の最も明瞭にあらわれている二著作をもとに労作の概念や労作の教育的意義を問題にしてみたい。

### 3. 「労作 (Arbeit)」と「労作教育(Arbeits erziehung)」の概念

まず「労作(Arbeit)」の概念を明らかにする前に、関連して著書『日本の勤労教育の思想史』での彼の教育学研究の立場を明確にしてみたい。このことは以下の部分に明瞭に示されているといえる。

「筆者がこのことを試み、従ってこの本を著すに至ったのは、ただ徒らな物好きからではなく、『労作教育思想史』と相俟って、わが国の今後の教育を改革するための、史的根拠を探究しておかななくてはならぬと思ったからである。一般に教育史を研究するのも、単なる史的興味のためのみではなく、その研究によって、将来の教育の改革に資するといふ意図をもってしなくてはならぬのであるが、筆者の年來の主張からすると、教育の改革はどうしても労作教育の方法をもつてなされるべきであり、教育のこれからの目的もまた、物質的並に精神的に価値あるものの生産に有能な人を作るにあるべきであるから、この意味における労作教育を中心として、将来の教育の改革を図るための主要な史的根拠としては欧米では労作教育思想史、わが国では勤労教育の思想史の外にはあり得ないのである。」<sup>7)</sup>

すなわち、ヨーロッパを中心とした労作教育思想、労作原理を考察することと、我が国の道徳的色彩の濃い勤労教育思想についての考察という両面から労作の概念を確立し、教育的意義を明らかにしたものである。この試みは、我が国の教育学研究において小林独自の発想であったと言つてよい。

まず小林は「労作」の概念について原語そのものにさかのぼって詳細な考察を行っている。労作という語は、ゴシック語の *Arbeits* (アルバイツ)、古代高地ドイツ語の *Arbeits* (アラパイト)、中世高地ドイツ語の *Arbeits* (アレバイト) から発達したものである。その語源は、*Arb* (アルブ) であつて、相続隷属奴僕等の意味から元来 *Arbeits* (労作) は、奴隷の労役、賊役の語であつた。そこから身体的労作を意味するようになったのであるが、18世紀に入り、新人文主義者であるカントらの時代に至り、精神的な概念にも用いられるようになった。

ではこのような「労作」の語が教育上どのような意味において重要視されるのであろうか。まずここで、小林が教育上「労作」という語を使用した根拠について明らかにしておきたい。彼は小西重直の著書『労作教育』を熟読し、小西の労作教育論に傾注していたのであるが、このことを踏まえて次のような見解を示した。

「労働といつては意味が実際化しすぎて聞え、作業もしくは勤労といつては創作、創造の意を

欠くのであるから、教育上の語としてわれわれは労作という語を使用するのである。」<sup>8)</sup>

ところで彼は、「労作教育学 (Arbeitspädagogik)」という語を提唱しているが、このことを「労作原理 (Arbeitsprinzip) なるものを脊柱とし、筋肉とする教育学」と規定している。そして小林は、我が国において労作教育学の名に値するものは、昭和4年に出版された竹井弥七郎の『労作教育学の発達』、小西重直の『労作教育』、野田義夫の『労作教育原論』の3著であると述べている。<sup>9)</sup> 特に小西重直の労作概念である「霊肉交渉」を高く評価している。<sup>10)</sup>

では労作教育とは具体的にはどのような概念として捉えることができるのであろうか。小林は、「労作教育 (Arbeits erziehung)」の解釈をこれまでの「労作」という語の歴史を踏まえて、広義に、「身体的、精神的自己活動による自立性へ (durch Selbstätigkeit zur Selbständigkeit) <sup>1</sup>

<sup>1)</sup> の教育とした。ここでも「勤労教育」というと倫理的、道徳的意味が一方向的に強く出過ぎる嫌いがあり、「作業教育」とあまりに実際的な意味を暗示する語感を伴うので、純粹の教育学再建のためには「労作教育」を用いるとしたのである。そこで労作教育の主張は、「体験教育」、「活動教育」、「郷土教育」、「生活教育」とさまざまな特色を持っており、全てが一致したものではないのは当然のことである。しかし彼は以下のように概括されると述べている。それは「自己活動の解釈が先験的であったり、経験的であったり、先験的—経験的であったりする相違はあるにしても、とにかく労作を自己活動的のものとする点では共通である。そうしてあらゆる労作学校ないし労作教育の要求は、すべて身体的、手工的労作を重んじ、特に重んじないまでも全く無視しないという点でも共通する。」<sup>12)</sup> のである。

#### 4. 労作教育の価値の探究

小林はこのような「労作」そのものの概念やその教育としての「労作教育」についての概念規定を踏まえながら、さらに進んで労作教育の価値についての展開を試みている。ここでの根本的趣旨は、教育の原理としての労作であり、教育の基調の転換とも言うべき新しい教育方法による教育学の建設であった。以下に彼の原文に即して考察してみようと思う。

労作教育は第1に、「身体及び健康のために役立つ。」<sup>13)</sup> ということである。第2に、「实际的、功利的目的のために有効である。」<sup>14)</sup> ということである。実際に体を動かすことによって生じる実行能力の大切さは言うまでもなく、あらゆる研究、発明・発見に対して旺盛な精神は、この実行能力に基づくことが多いことは周知の通りである。第3に、「すべての労作は、知識的陶冶の基礎となる。」<sup>15)</sup> ことをあげている。いわゆるペスタロッチの技術のABCもこの点から重視されたものであるが、特に直観の原理に関して労作教育の価値は大きく認められるのである。小林はこのことを「認識の出発点である直観はいわゆる動的概念であるが、これを形成する上に手工的労作の大切なのは何人も認めることである。」<sup>16)</sup> と説明している。さらに労作教育の価値として第4には、「芸術的陶冶のためにも、大いに労作によらなければならぬ。」<sup>17)</sup> としている。第5には「道徳的、社会的陶冶に欠くことのできないもの」<sup>18)</sup> であることをあげている。これは、労作が実行能力を発揮し得る点から挙げられたものである。つまり労作は意思の力を強めるもとであり、動的概念そのものであるから、この労作が意思の力と密接に関係するのである。第6に

「全人陶冶」に貢献することである。<sup>19)</sup> この全人陶冶と労作教育の関連は、とりわけ小林が強調したものである。労作教育が全人陶冶に全面的に貢献することの実証は、我が国における新教育運動の展開をみれば当然のことである。とくに大正新教育思想の影響を受けて発展した昭和の新教育は、小林をはじめとした労作教育の理論が唱道され、児童中心主義、体験的学習重視の流れが築かれるのであった。ここでの彼の労作教育は、労作が単なる教科や特別活動的・訓育的色彩を帯びたものではなく、労作原理に基づいた教育学であり、その理論を踏まえた教育実践であったのである。

以上のような彼の考えは、主著『教育原理』において明瞭に、そして簡潔にまとめられている。「本当に仕事し、本当に労作し、本当にはたらくといふことは、身体的・技術的・手工的の活動であるのみではなく、同時に精神的の活動であって、この方向に被教育者を導き入れるといふことこそ、教育の方法として最も重視されるべきものであって、個性を伸長するにも、社会性を陶冶するにも、自由な自己活動を促進するにも、ただ労作的になされなくてはならぬのである。学習は労作的学習であるべく、直観は労作的直観であるべきものである。かくして労作教育の方法は、方法中での方法であるといはなくてはならぬのである。」<sup>20)</sup>

このことは現代の体験的学習を推進していく上で、重要な示唆を与えているものと思われる。

## 5. おわりに一労作教育思想と勤労教育思想の融合

これまで小林澄兄の労作教育思想について考察、吟味してきたが、彼の教育学における一大関心事が、労作教育学の建設にあったことをわれわれは十分伺い知ることができるのである。

小林が労作教育思想の意義を明らかにし、ヨーロッパを中心としたその思想を全面的に取り上げ、深く考究した業績は、教育学的に大きな価値をもつものである。このことを西村皓は、「労作教育学の最後の最善の建設に到ることを意図とし、労作教育の思想を歴史的考察のもとに明らかにしたものは、日本においてはもちろん、欧米においてもあまりその例をみません。」<sup>21)</sup> と高々に賞賛している。

さらに注目すべきことは、小林が労作教育の史的根拠をヨーロッパを中心とした *Arbeits-erziehung* (労作教育) の思想と、我が国の特色ある勤労教育思想とを照合、比較して考察を行った点である。

小林は著書『日本の勤労教育の思想史』の中で、「『日本的』と『西洋的』」の節を加え、労作教育と勤労教育について、「東洋的(日本的)」にも「西洋的」にも長短があることを示している。さらに進んで、次のように結論づけている。「概していへば、『西洋的』は分析的であり、又は分析的・総合的であるに反して、『東洋的』・『日本的』は直観的であり、又は直観的・断定的である。一方は科学的、自然科学的であり、他方は非科学的・非自然科学的である。同じ教育・労作(勤労)教育を論ずるにしても、一方と他方との間にはたしかに右のやうな相違がある。一方は児童青少年団の心理的発展もしくは発展心理に注意を払ひ、他方はかかる方面にほとんど無頓着である。一方は学校教育を主題とし、他方は人間性の解放を当然のこととし、他方は階級決定論に支配され易い。およそこのやうな区別を、東西の労作(勤労)教育思想のうちにも認めざるを得な

いのである。また一方は「労作」教育の思想といふに、他方は「勤労」教育の思想といふにふさわしいのであって、従って一方はより教育的に、他方はより倫理的に傾いたのであった。」<sup>22)</sup>

要するに、小林の労作教育思想は、欧米教育思想である労作教育思想の受容と、我が国独特の倫理的色彩の強い勤労教育の思想を融合化して労作教育の思想を融合化して労作原理を確立したものと云ってよい。

最後になったが、小林澄兄の労作教育思想は特殊な教育思想として取り扱われるものではなく、教育の神髄を根本からついた教育思想として再評価し、現在の我が国の教育問題からも現代的意義を見出すことができると考えられるのである。

1) 生涯と功績の概略については以下の通りである。

明治 19 (1886) 年 6 月 18 日、長野県上伊郡群東箕輪村に三男として生まれた。同 32 年に郷里の高等小学校を卒業し、同 34 年には早稲田中学校に入学をした。その後 35 年には、慶応義塾普通部に第 2 学年生として転学し、38 年に卒業、慶応義塾大学予科に進学ののち、同 40 年文学部に進学した。明治 43 年同学部を卒業し、『慶応義塾学報 (現在の『三田評論』) の編集事務担当として活動した。

明治 44 年から大正 3 年まで普通部の教員として活躍したが、大正 3 年 4 月から同 6 年 4 月まで教育学研究のため、独、イギリスをはじめ欧米留学を経て、大正 6 年慶応義塾大学教授となる。ここでは文学部において、教育学、教育史等の講義を担当し、昭和 21 年まで教授の職に就いた。大正 8 年から大正 14 年までの間は、幼稚舎の主任も務めた。

大正期の小林の研究活動は、特に大正後期から昭和初期にかけての新教育学、欧米新教育思想の導入とその理論的研究に特色がみられる。大正 11 年には、『三田評論』にダルトンプランの紹介を行ったり、大正 12 年に出版された『最新教育思潮批判』や翌年の『続最新教育思想批判』において、新教育に関連した研究が掛けにされた。昭和に入ると、2 年には欧米教育の視察へと精力的に参加し、昭和 10 年には文学博士の学位を取得した。

ところで彼の教育学における一大関心事は「労作教育」であった。彼の戦前における労作教育研究の集大成を我々は、大著『労作教育思想史』(昭和 9 年)にみることができる。

彼は昭和 12 年から 21 年 9 月まで慶応大学文学部長をつとめ、慶応義塾の発展に大きく貢献した。昭和 16 年には、長田新、石山修平、入沢宗寿、加藤仁平らとともに、日本教育学会の設立を提案し、同 17 年には設立の運びとなり、理事に就任したのである。

昭和 21 年、占領軍指令に基づく、「教職員適格審査」によって教職を追放されたが、27 年、慶応義塾大学名誉教授兼講師となり復帰した。戦後も『福沢論吉と新教育』(昭和 22 年)、『労作教育新論』(同 23 年)、『新教育学入門』(同 23 年)、『欧米新教育概説』(同 24 年)をはじめ矢継ぎ早やに出版活動を行った。

特に労作教育を唱道するに小林にとって、戦後の大作というのが昭和 26 年に出版された『日本の勤労教育の思想史』である。その後も小林は一貫して労作教育に関心を向け続け、『日本教育の再出発』の中での「生産教育から労作教育へ」の執筆や、『国土社教育全書』第 2 巻の中での

「教育と労働とを結びつけた教育思想の系譜」の執筆をはじめ多くの著書や論文で「労作教育」の教育としての重要性を訴え続けたのである。

昭和5年12月の野口援太郎との「新教育協会」発起人をはじめ、昭和30年には「国際新教育協会」を設立し、長年に亘りその会長として協会並びに新教育の発展のために尽力した。このことは、我が国新教育運動の発展に大きく貢献したものとして特記すべきものである。

なお、小林澄兄の生涯をまとめるにあたって以下の先行研究を参考にした。

○小原國芳 『日本新教育百年史』第1巻総説（思想・人物）玉川大学出版部

1970 P.P.302~303

○西村皓「労作教育思想史解説」『労作教育思想史』玉川大学出版部 1971 P.P.273~292

○小林澄兄博士喜寿記念論文集編集委員会編『小林澄兄博士喜寿記念論文集日本の教育のゆくえ』講談社 1966

2) 小林澄兄『労作教育思想史』丸善出版 1934 「序」

3) 小林澄兄『労作教育思想史』玉川大学出版部 1971 「序」

4) 小林澄兄『教育原理』国土社 1954 P.254

5) 小林澄兄『日本の勤労教育の思想史』誠文堂新光社 1934 「序」

6) 前同書 「まへがき」

7) 前同書 P.1

8) 前同書 P.8

9) 前同書 P.236

10) 前同書 P.P.252~253

11) 前同書 P.15

12) 前同書 P.253

13) 前同書 P.263

14) 前同書 P.264

15) 前同書 P.264

16) 前同書 P.264

17) 前同書 P.265

18) 前同書 P.266

19) 前同書 P.267

20) 小林澄兄『教育原理』国土社 1954 P.260

21) 西村皓「労作教育思想史解説」『労作教育思想史』玉川大学出版部 1971 P.273

22) 小林澄兄『日本の勤労教育の思想史』誠文堂新光社 1934 P.196